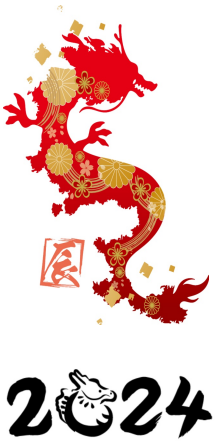
捷光寺だより

令和６年
１月号

行事案内

●１月１日（祝）
「寺年賀参り」　午前中
●１月４日～６日
「家祈祷参り」
　６時３０分から
●１月１４日（日）
「終い御講(寄合会計)」
　１３時３０分から



謹賀新年

【窮亀の恩】

古代中国の故事に出てくるお話。晋の時代に孔愉という人物がいました。ある時、道ばたで大亀が籠に入れられているのを見て、哀れに思って、その亀を買い取り、川に放してやりました。すると亀は泳ぎながら何度も彼を振り返り、まるでお礼を言うかのように去って行きました。

のちに孔愉は余不亭という所に領地を与えられ長官に任命され、その証として金の亀の印鑑を作ったのですが、印を見ると、亀の首は後ろを向いている形です。そこで印を作り直すとまたもや首は後ろの方を向いていました。こうして３度作ら直させても同じことが続きました。孔愉はふと、その形が以前に助けてやった亀が去っていく姿に似ていることから思い出し、「ああ、あの時の亀がこうしてわしに恩返しをしてくれたのか」といって、その印を大切にしました。亀の恩返しによって孔愉は出世を果たしたというお話。

孔愉のようにただただ目の前で困っている人がいるから助けるというほとけの心を今年一年心がけたいものです。

正月行事のあれこれ

【七福神のいわれ】

大黒天・恵比寿・毘沙門天・弁財天・福禄寿・寿老人・布袋の７つの神を合わせて七福神と言います。お正月の松の内に「七福神巡り」をされる方もいるのではないでしょうか。

七福神は同じ物語や国の神さまではなくそれぞれが出身の異なる神さまです。インド出身の神さまは大黒天・毘沙門天・弁財天、中国からは道教に由来する福禄寿・寿老人、そして実在した禅僧契此がモデルとされる布袋。日本出身は恵比寿・・・というようになります。

どうしてバラバラの神さまが一つの七福神として祀られるようになったのかは諸説あるそうですが、一説には、中国の晋の時代に、老荘思想の影響を受けて、俗世を離れて竹林に集まり、文学を愛し酒や琴と嗜むなど風流に親しむ生き方をした「竹林の七賢人」になぞらえ、室町時代中頃から始まったと言われています。

江戸時代、徳川家康が天台宗の天海僧正に「国が栄えるようになり、人徳が高まるようになるには、どのような道が大切であろうか」と質問したのに対し、僧正は「仁王護国経」（仏教における国王のあり方について述べた経典）などの経典に説かれている教を大切にすれば、七難即滅し七福即生します」と答えました。さらに家康は「七福とは何か？」と尋ねると、僧正は「七福とは、「寿命(長寿)・有福(富財)・人望・清廉(正直)・愛敬・威光・大量であります」と答え、この七つの福徳が、人生にとって、大切であることを説明しました。大いにこの話を喜んだ家康は、早速、狩野派の画家に七福の神々を描かせました。

ちなみにそれぞれが以下のようになります。

・寿老人(長寿)…健康長寿の神さま
・大黒天(富財)…沢山の富、家運繁栄
・福禄寿(人望)…学問の神さま
・恵比寿(正直)…商売繁盛の神さま
・弁財天(愛敬)…財運と芸能の神さま
・毘沙門天(威光)…戦いの神さま
・布袋(大量)…様々な福徳の神さま